

ならないので、Sさんが自ら進んで残留を引き受けくださいました。炭鉱の街の人々は、発電所の人間だけ逃げ出すのを知つてどれほど恨まれたことでしょう。運命かもしれません。日本人を乗せた貨物列車が発電所前を走り去るとき、Sさんは発電所の屋上から見えなくなるまで手を振つておられました。（Sさんは去年の春、米国カリフォルニアで84才の生涯を終えられました。）

大連では会社の厚意で、社員は避難民（※⑤）として転勤者として受け入れられ、苦しいながら生活できるようになりました。会社は昭和21年2月にソ連軍に接收（※⑥）され「長」の付く仕事にはソ連人が就きました。その秋、ソ連地区引揚が始まり、私も翌年2月に無事に長崎県佐世保港に帰ることができて、本当に幸運の連続でした。

なお、暴動の状況はパールバッカの小説「大地」に書かれているそのままです。

原爆の落ちたあの日

長崎市 西山 ハツ子（享年73歳）

空襲がだんだんひどくなるので隣の和田さんの山で、城山に小屋を建て疎開の準備をし、近所4・5軒で始めることにしました。その日の朝、「日陰かのうちに地ならしを」と思い気は焦るけど、空襲警報、解除、また空襲とくり返しで防空壕を入つたり出たり。そうしているうちに時間は経つばかり。そこに、共同水道の料金の切符がきました。払いに行く当番は、何日かのうち近くの局に行けばいいことになつていたので、すぐ行つたけど「もうこれはここではだめ」と言われて、「たつた今来たのに」とぶすぶす言いながら6つの哲治と、4つに足りない弘明を気にしながらも家に残して、その足で

※⑤避難民 戦争・戦闘などの危険から避難した人々。

※⑥接收 権力機関がその必要上、強制的に人民の所有物を收受すること。

役所まで行きました。その帰りの船で、いつものように窓際に座り、おっぱいを晴江に飲ませ、舟が出たら外を見せようと思っていた矢先、目に刺さるような光と、大きな音。舟は木の葉のように揺れるし、「爆弾だ。床に伏せろ」と男の大声。晴江に覆いかぶさるようにして伏せました。今度は「舟を出て防空壕にいけ」と言う声で、大波止の天井の薄い壕の中に入つて、流れる汗と乱れる髪をかきあげたら、髪の毛はじりじりに焦げていきました。窓の光を受けていた部分でした。壕の中で泣くやら騒ぐやらしているうちに「上の県庁まで火が回った。あぶない、早く逃げろ」と言います。気が付いてみると荷物はみんな舟の中。これではと思い、舟に戻つて晴江を帶でおんぶしようとしました。ところが荷物は何もありません。仕方なく、大浦のグラバー邸の下の壕に入りました。これではと思い、舟に戻つて晴江を帶でおんぶしと聞かれました。「平戸小屋（※①）」と言うと、「自分は飽の浦（※②）」。と言つて「これからどうする？」と言うので、「日出町の親戚に知恵を借りに行こうかと思つている」と言つたら「私もついて行く」と言つて離れません。溺れる者は藁をも掴むとはあの時のことかも。

腹は減るし、日は暮れる。爆音のする下を日出町の中尾の家まで行きました。おじさんが一人いて「皆、大山に疎開している」と言つて連れてきました。おばさんは、話を聞いてさつそく食べられるものは何でもかき集めて、塩味をちょっとつけて、もちろん米粒なんてものは一粒も入つてはいない。そんな物を少しづつ分けて食べるのに、私には見たこともない押しがけのお客さんまでついてきたもんで、気の毒でたまらないでねー。そのうちおじさんが「大波止まで行つてきた」と言います。「今、造船の舟が来るから、その舟に乗らないともう帰れん」と言うので、それから出かけましたが、桟橋に着くまで爆音がすると物陰に隠れ、遠ざかれば走りながら、やつと舟に乗り、水の浦（※③）の桟橋に着いて目についたのが三菱造船の食堂が火の海ですが、誰も消するものいません。燃えるがまま。辺りは瓦やガラスで足の

※①平戸小屋
長崎市平戸小屋町。爆心地より約2、5キロメートル。強制疎開先であつた。

※②飽の浦
長崎市飽の浦町。平戸小屋町の約1キロメートル南の町。学校の体育館まで三菱造船所の工場として使われていた。

※③水の浦
長崎市水の浦町。平戸小屋町と飽の浦町の中間に位置する。

踏み場もないくらい。心は家に帰っている。水の浦の石段をどうして上がつたかわからない。気は焦るけど、足が震えて進まない。やっと着いてみると家はペしやんこ。でも、七輪をおこす用意をして外に出してあるので、「ああ父ちゃんは無事だったなあ」と言いながら中に駆け込んでみると、弘明が包帯を巻かれて寝ていたので「母ちゃんが悪かつた」と晴江は背に2人の子を両脇に思いつきり泣きました。後で話を聞くと、大波止の壕の中で、近所の西村さんの奥さんに会っていたので、そのことを教えてくれたそうで、大浦にでも行っているだろうと思つてあまり心配しなかつたそうだ。

これがその日1日の出来事。^{できごと}。だけど、そこからがまた大変。この後が。もう、我家だけじやあないから、この話やめとこう。

二度と見たくない「夢」

東大阪市 竹内 澄子（69歳）

昭和16年国民学校1年生。12月8日第二次大戦が始まる。翌2月、シンガポール陥落（※①）で、夜に提灯行列で街の中を歩く。今でもその灯りが目の前にちらつく。ラジオは朝から軍歌が流れ、勝利のニュースばかりの毎日。

4年生の始め、児童の疎開（※②）が始まり縁故（※③）、学童（※④）に分かれた。島根県のお寺だったが、私は病弱で残留組とされ、毎日6年生と同じ教室で勉強していた。12月に第二次疎開が始まり、私も参加することに。担任の先生や級友に会えると喜び、12月初旬の夕方、心配顔で見送つている母にも笑顔で電車の中から手を振つている私。長い夜汽車は疲れたが、翌朝一面銀世界の小さな駅に降り、迎えの級友たちの顔を見てほつとした。先生はすでに大阪に帰られたとのこと。一寸淋しい気もしながら、お寺まで歩いた。ちょうど昼食時、本堂に長い机が並び、その上のお茶碗を持った途

※①陥落
空襲・火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること。

※②疎開
※③縁故疎開
血縁・姻戚などの縁づきを頼りに疎開先を選ぶこと。

※④学童疎開
太平洋戦争の末期に、戦争の災禍を避けるため大都市の国民学校の児童を、農山村地域に集団的または個人的に移動させたこと。